

主な登場人物



アナベル・マクブライド 主人公。オオカミ谷近くの農場にくらす少女。十一歳。
ベティ・グレンガリー オオカミ谷近くに越してきた少女。十四歳。

お母さん(セイラ) アナベルの母親。厳しくもやさしくアナベルを見まもる。

お父さん(ジョン) アナベルの父親。農場を営む。

ヘンリー アナベルの弟。九歳。

ジェイムズ アナベルの弟。七歳。

リリーおばさん アナベルの父親の妹。郵便局長。

アナベルの祖父母 アナベルの父親の両親。

ルース アナベルの友人。

アンディ・ウッドベリー ベティのボーイフレンド。

テイラー先生 学校教師。

ベティの祖父母 ベティの父親の両親。

アンセル・ファース 長年この地に住む、ドイツ系の親切な農夫。

アニー・グリブル 電話交換手。

オレスカ保安官 オオカミ谷付近を担当する。

コールマン州警察官 ピッツバーグ市にある州警察署の警察官。

トビー オオカミ谷近くに住みついた放浪者。

序章



十二歳になるその年、わたしは嘘をおぼえた。

子どものつくような、ささいな嘘ではない。本物の恐怖にかきたてられた、まぎれもない嘘——わたしの言ったこと、わたしのしたことが、わたし自身を、それまでのくらしから連れ去り、まったく新しい世界へと放りこんだ。

一九四三年の秋、わたしのおだやかなくらしが、目まぐるしく回りはじめた。戦争が世界中を大混乱におとしいれたせいもある。でも、それだけではない。わたしたちの丘陵地へやってきた黒い心を持つ少女。あの子が何もかも変えてしまったせい。

あの頃は、何があるかわからないまま、自分が、激しく音をたてて回る風車の軸になったような気がしていた。それでも、わかっていた。不安だらけの毎日をずっと、本とリングを手納屋にかくれてはいけけない、成り行きまかせにしてはいけけないと。十二歳になるには、

わたしなりに役立つことをしなくてはならない。そうしてこそ、自分の場所、小さな自信を手に入れ、ちゃんとした大人になるための一步を踏みだせる。

けれども、ことは、それだけですまなかつた。

十二歳さいになるその年、わたしは、自分の言ったこと、自分のすることへの重みを知った。

ときには重すぎて、ほんとうにそんな荷物を背負せおいたいのかわからなかつた。

けれども、とにかく背負せおい、精一杯せいいつぱい、歩いたのだつた。



はじめは、五歳さいのときのクリスマスにリリーおばさんがくれた陶器とうきのブタの貯金箱ちきんばこだつた。

貯金箱ちきんばこがないのに、母さんが気づいた。

「アナベル、貯金箱をかくしたの？」母さんはわたしの部屋で、壁かべの下のすそ板をみがいっていた。わたしは夏服をしまつていたところ。わたしの部屋は小さくて、たいして物がなから、すぐ気がついたのだろう。家具と窓まどのほかは、ベッドのわきに、くしとブラシと本があるぐらい。「だれも、アナベルのものを取つたりしないわよ。かくさないでだいじょうぶ」母さんは四つんばいになってゴシゴシみがいっている。体がゆれつづけ、黒い靴くつの底が上を向いている。

母さんに顔を見られなくて、ほつとした。そのときわたしは、教会へ行くときの服をたたんでいた。あぎやかすぎるピンク色のワンピースで、来年の春には小さくて着られなくなつているとよいと思つたばかり。今、わたしの顔はそのピンク色そつくりの色にちがいない。

貯金箱は、その日学校から帰ってきて、一セント硬貨を出そうと振ったときに、うつかり落としてしまったのだ。こなごなに砕けて、何年もためてきたコインが散らばった。全部でもう十ドル近くになる。貯金箱のかからは家庭菜園の向こうにうめた。そして、コインはまとめて古いハンカチに包み、四すみを結び合わせて、ベッドの下にある冬用ブーツの中にかくした。誕生日に、おじいちゃんが集めている中からくれた一ドル硬貨といっしょに。

その一ドル硬貨は、貯金箱に入れなかった。ただのお金に思えなかったからだ。お金というよりもメダルみたいで、硬貨に刻まれた女の人がとても美しかった。りつばで、神妙で、とがった冠をかぶっている。

手放すのは一セント硬貨にすると決めていた。一枚だけでなく、二、三枚になるかもしれない。でも、あの一ドル硬貨は、ぜつたいにわたさない。オオカミ谷へ続く道で待っている、あの恐ろしい少女には。

毎日、わたしは弟たちと歩いて学校へ通った。九歳のヘンリーと、七歳のジェイムズ。オオカミ谷へ下り、谷からのぼり出て家へ帰る。その道で、大きく強く年上のベティという少女が、放課後わたしを待っていると聞いたのだ。

ベティは、祖父のグレンガリーさんとくらすよう町から連れてこられた。グレンガリーさんの家はラクーンクリークの川岸にあり、うちの農場からすぐ近くだ。三週間前にベティが学校に現れてから、ずっとこわかった。

うわさでは、ベティが田舎に送られてきたのは「矯正不可能」だからだそうで、わたしはその言葉を学校の大きな辞書で調べて知った。田舎で祖父とくらすのが罰なのか、行動を正すためのかはわからなかったけれど、何も悪いことをしていないわたしたちにベティを押しつけるなんて、あんまりだと思った。

ベティはある朝学校に現れ、歓迎どころか、たいした紹介もされなかった。すでに四十人近くの生徒がいて、小さな学校は定員以上になっていたので、一人分の席を二人で使わなくてはならない子も多かった。机の面はななめになっていて、傷だらけ。その上を、生徒二人が文字を書いたり計算したりするのに使う。机の面はふたになっていて、開けると中に物を入れられる。そこに二人分の教科書を入れた。

わたしはかまわなかった。だって、仲良しのルースといっしょの机だったのだ。ルースは、黒髪で真っ赤なくちびるをした色白の女の子。おとなしめの声で話し、服にはぎつちりアイロンがかかっていた。わたしと同じぐらい読書が好きで、それが二人の大きな共通点。それから、二人ともやせていて、ちゃんと風呂に入る習慣があった（この学校では、みんながそうではなかった）ので、ぴつたりくつついてすわっても、いやではなかった。

その日ベティがやってきて教室の後ろに立つと、テイラー先生が「おはよう」と声をかけた。ベティはだまって腕を組んでいる。「みなさん、この子はベティ・グレンガリー」まるで歌に出てくる名前のように聞こえた。

わたしたちは、おはようとあいさつをした。なのに、ベティは何も言わないで、わたしたちを見ている。

「ちよつときゆうぎゆうづめの教室だけど、ベティの席を見つけましょうね。上着とお弁当入れを、そこにかけていらつしやい」

先生がどこにベティをすわらせるのか、みんな静まり返って見つめていた。けれども、先生が決める間もなく、ローラというやせた女の子が、さつさと教科書を抱えて仲良しのエミリーのとなりに移った。

そして、その机がベティの席になった。わたしとルースの席のすぐ前。二、三日すると、ベティはわたしの髪につばを飛ばしたり、手を伸ばしてわたしの脚をえんぴつでつついたりするようになった。ひりひりする赤い跡が脚に残った。そんな目にあうのはもちろんいやだったけれど、ベティの標的が、ルースでなくわたしでよかったと思った。ルースはわたしより小さくて、弱い。それに、わたしは弟たちがいて、もつといろんなことに手こずらされていたけれど、ルースは兄弟がいない。ベティが来て最初の一週間、わたしは、ささいな意地悪などそのうちやめ

るだろうと思い、気にしないようにしていた。ふつうであれば、先生が気づくだろう。けれども、テイラー先生は、自分に見えないところできていることは気にしないでいいと、割り切らなくてはならなかった。

先生は一人で全学年を教えていたのだ。黒板近くに並べてあるいすには、先生が授業をする学年の生徒がすわる。残りの生徒はみんな、自分の学年の番になるまで、それぞれの席で自習をした。

年長の男子の中には、寝てばかりの子もいる。授業を受けているときも、おおつびらに先生をばかにしていたので、どうも先生は短い時間で切り上げていたようだった。そういう男子たちはみな、体が大きく、すでに農場の作業を担う働き手だった。だから、種まきや刈り入れ、家畜の集め方を教えない学校など、行く意味がないと思っていたのだ。それに、大人になったときにまだ戦争が続いているかもしれない、学校なんて、ドイツ人と戦うのになんの役にも立たないと、よくわかっていた。農場や牧場で働いていれば、兵隊に食料を提供する者だからと競争に行かないですむかもしれない。あるいは、戦うのにふさわしい強い体を作れるかもしれない。けれど、学校は役に立たないのだ。

それでも、冬の一番寒い頃になると、家でやらされる仕事は退屈で面倒な作業ばかりだ。フェンスや納屋の屋根、馬車の車輪の修理。そうになると、たいていの男子は、凍えるような風の中